

# 「中学生のみた昭和10年代」と個人生活史研究： 三段階の分析の試み(中) (1)

著者	水野 節夫
雑誌名	社会労働研究
巻	39
号	2-3
ページ	370-342
発行年	1992-11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00018649">http://hdl.handle.net/10114/00018649</a>

32. Scheff, T. J., 1979, Catharsis in Healing, Ritual, and Drama, University of California Press.
33. Sluzki, C. E. and Ransom D. C.(eds.), 1976, Double Bind: The Foundation of the Communicational Approach to the Family, Grune & Stratton.
34. 館・廣瀬監修/著, 1992, 『バーチャル・テック・ラボ「超」現実への接近一』, 工業調査会。
35. 高木光太郎, 1990, 「5章 何のための記憶か—フラッシュバルブメモリーの機能論—」, 佐伯・佐々木編, 『アクティブ・マインド—人間は動きのなかで考える』所収, 東京大学出版会, pp. 141—170。
36. Taylor, Charles, 1989, Sources of the Self: The Making of the Modern Identity, Harvard University Press.
37. 匿名希望の保母さんの「ひととき」への投書, 1989, 「心の距離縮めた転勤劇」, 『朝日新聞』, 2月25日付け朝刊。
38. Tomkins, S. S., 1987, “Script Theory,” in Aronoff, J., Rabin A. & Zucker R. (eds.), The Emergence of Personality, Springer, pp. 147 - 216.
39. 上田吉一, 1988, 『人間の完成—マスロー心理学研究—』, 誠信書房。
40. Weil, Andrew, 1972, The Natural Mind: A New Way of Looking at Drugs and the Higher Consciousness, Houghton Mifflin. 名谷一郎訳, 1977, 『ナチュラル・マインド』, 草思社。

☆本稿は平成4年度文部省科学研究費一般研究(c)による成果の一部である。

房。

16. James, William, 1890, The Principles of Psychology, in The Works of William James, Vol. 12, 1981, Harvard University Press.
17. Laplanche, J. and Pontalis, J., 1967, Vocabulaire de la Psychanalyse, Presses Universitaires de France. Nicholson Smith, D. (tr.), 1973, The Language of Psycho-analysis, The Hogarth Press.
18. Laski, M., 1962, Ecstasy: A Study of Some Secular and Religious Experiences, Indiana University Press.
19. Mack, J. E., 1970, Nightmares and Human Conflict, Houghton Mifflin Company.
20. Martin, L. L. and Tesser, A., 1989, "Toward a Motivational and Structural Theory of Ruminative Thought," in Uleman, James S. and Bargh John(eds.), Unintended Thought, The Guilford Press, pp. 306 - 326.
21. Maslow, A H., 1962, Toward a Psychology of Being, Van Nostrand Reinhold. 上田吉一訳, 1964, 『完全なる人間』, 誠信書房。
22. McAdams, Dan P., 1985, Power, Intimacy, and the Life Story: Personological Inquiries into Identity, The Dorsey Press.
23. McKellar Peter, 1989, Abnormal Psychology: its Experience and Behaviour, Routledge.
24. Merleau-Ponty, M., 1945, La Phénoménologie de la Perception, Editions Gallimard. 竹内・木田・宮本共訳, 1974, 『知覚の現象学』(2), みすず書房。
25. 水野節夫, 1992, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究—三段階の分析の試み—(上)」, 『社会労働研究』, 第38巻, 第3・4号, pp. 80 - 118。
26. 中村明, 1986, 「第六章心情の表現」, 今井文男編, 『表現学の理論と展開』(表現学大系総論篇, 第1巻), 教育出版センター, pp. 83 - 100。
27. 中村雄二郎, 1979, 『共通感覚論-知の組みかえのために-』, 岩波書店。
28. 中野卓編著, 1989, 『中学生のみた昭和十年代』, 新曜社。
29. 大谷和利, 1992, 「マルチメディアとヴァーチャル・リアリティ」, 『UR』, No. 6, ペヨトル工房, pp. 90 - 101。
30. Rheingold, H., 1991, Virtual Reality, Summit Books.
31. 佐伯胖, 1992, 「錯覚工学としてのヴァーチャル・リアリティ」, 『UR』, No. 6, ペヨトル工房, pp. 17 - 24。

35) 高木〔1990〕参照。

『中学生』論文(中) - 1 のための参考文献一覧

1. Ackerman, Diane, 1990, A Natural History of the Senses, Random House.
2. Brewer, W. F., 1986, "What is Autobiographical Memory?", in Rubin, David C. (ed.), 1986, Autobiographical Memory, Cambridge University Press, pp. 25 - 49.
3. Brown, Peter, 1991, The Hypnotic Brain: Hypnotherapy and Social Communication, Yale University Press.
4. Bucher, J. Cornelius, 1990, Three Models on a Rocking Horse: A Comparative Study in Narratology, Gunter Narr Verlag.
5. Chatman, Seymour, 1978, Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film, Cornell University.
6. Cohn, Dorrit, 1978, Transparent Minds: Narrative Modes for Presenting Consciousness in Fiction, Princeton University Press.
7. Csikszentmihalyi, M. and Csikszentmihalyi I. (eds.), 1988, Optimal Experience, Cambridge University Press.
8. Duerr, Hans P., 1978, Traumzeit: Ueber die Grenze zwischen Wildnis und Zivilisation, Syndikat Autoren-und Verlagsgesellschaft. [Felicitas Goodman(tr.), 1985, Dreamtime: Concerning the Boundary between Wilderness and Civilization, Basil Blackwell].
9. Freud, Sigmund, 1899, Die Traumdeutung, Studienausgabe, Bd. 2. 高橋義孝訳, 1968, 『フロイト著作集2 夢判断』, 人文書院。
10. 阪田寛夫, 1989, 「ノンキが来た一宮崎丈二の生涯一」, 『新潮』, 八月号, pp.6-121。
11. 服部桂, 1991, 『人工現実感の世界』, 工業調査会。
12. Howes, David(ed.), 1991, The Varieties of Sensory Experience: A Sourcebook in the Anthropology of the Senses, University of Toronto Press.
13. Huxley, A., 1954, The Doors of Perception, 1956, Heaven and Hell, Chatto & Windus. 今村光一訳, 1984, 『知覚の扉／天国と地獄』, 河出書房新社。
14. 石原他, 1991, 『読むための理論—文学・思想・批評』, 世織書房。
15. 石田浩之, 1992, 『負のラカン—精神分析と能記の存在論—』, 誠信書

に関連した主題群を論じている魅力的な著作として、Duerr〔1985〕がある。

27) したがって体験群3は、McAdams氏の言う「意義深い人間的体験」にほぼ当たると言っていいたいだろう。

28) Laski〔1962〕は豊富な事例を提供してくれている。McAdams〔1985:pp. 137-138〕も参照のこと。

29) ピーク体験というのは、A. Maslowの命名になるもので、彼はこれを「最高の幸福と充実の瞬間」(Maslow〔1964:p. 105〕)と性格づけている。Maslow心理学をきめ細かに研究している上田氏は、「…至高経験〔ここで言うピーク体験のこと〕は、これを概略まとめてみると、敬虔、帰依、無我といった宗教的体験、啓示、悟り、回心、靈感といった神秘的体験、献身、利他、信頼といった愛情体験、洞察、閃めき、直観といった創造性体験、感動、共鳴、讃美といった美的体験などを、すべて包括した極めて多様な体験様式から成っていることがわかる。」(上田:p. 178)と非常にすっきりとした説明を与えてくれている。本文では、ピーク体験をプラスの体験の一種として位置づけているわけだが、これは、上田氏の言い回しを借りれば、Maslowの言うピーク体験のうち基本的には宗教的体験、愛情体験、美的体験について当てはまるものであって、残りの神秘的体験と創造性体験については、ぼくの場合すぐ後に説明する変容体験に属するという位置づけになることは、言うまでもない。

なお、これに関連して、念のために次の点を指摘しておこう。それは、本文で提示する五種類の体験のうち、はじめの四つの体験は、本人にとってもつ意味に(プラスもしくはニュートラルからマイナスへ、マイナスもしくはニュートラルからプラスへといった)変化が見られない瞬間、状態もしくは過程を指し示しているのに対して、最後の変容体験だけはそうした意味変化を生み出す瞬間もしくは過程を指し示しているということである。

30) Csikszentmihalyi〔1988〕はフロー体験に関する集大成的著作である。

31) Scheff〔1979〕参照。

32) 精神分析的観点をも組み込んだかなり包括的な悪夢研究にMack〔1970〕がある。

33) Laplanche and Pontalis〔1973:pp. 282-287〕参照。

34) Sluzki and Ransom〔1976〕には、1956年のベイトソンらの有名な論文も含めて、この時点までの二重拘束理論に関する主要な議論が紹介・検討されている。

状態における連想的体験に属するという位置づけになるだろう。なお、フラッシュ・バック的体験とフラッシュ・フォアード的体験については Chatman〔1978:pp. 63-65〕を参照のこと。

25) McAdams〔1985:p. 135〕によれば、「最初期記憶はこれを想起する人物が現時点でおかれている生の状況についての情報を提供してくれるものだ」というのが A. Adler の見解であるという。McAdams〔1985:pp. 134-136〕はこの最初期記憶を「意義深い人間的体験」の筆頭にあげている。その他にこの体験に属するものとして彼が注目しているのは、ピーク体験とどん底体験、エクスタシー体験とフロー体験、そして彼が「核となる光景」と呼んでいるものである。

26) 現時点ではまだ十分展開できるだけの準備ができていないのではっきりしたことは言えないが、それでも、この日常的覚醒意識からのズレの際立った体験という主題領域というのは、人間の多様な〈awareness〉のありようを探っていく際には戦略的に重要な位置を占めているという予感がする（「平常とはちがう意識のあり方を体験したいという内的欲求を」(p. 44) ぼくたちが持っているという立場からするワイル〔1977〕の議論の立て方は、ぼくが注目しようとしている発想に近いような気がする）。とりわけ、この問題は、自己論の水準にひきつけて言えば、日常的覚醒意識に支えられた自己とは解離したところに存在する別の自己という問題を示唆しており、その意味で、パーソナリティーの解離という現象に媒介されて、(ぼくとしてはまだあまりよく知らない) シャーマニズムの問題とともに多重人格論という主題領域にも接続しているように思う。この多重人格に関わる主題領域自体は、それなりの歴史をもっているとはいえ、催眠療法を乗り越える形で生み出されてきた精神分析が 19 世紀から 20 世紀にかけて優勢な思考様式として定着してくるにつれて葬り去られるという時代が続いたが、おそらく 1950 年代以降ではないかと思われるが、この精神分析的発想の呪縛が解け始めるとともに、再び注目を浴びるはじめ現在に至っているようだ (McKellar〔1989:pp. 67-90〕参照)。

なお、トランス体験の概要を知る上では、催眠現象と脳との関連について刺激的な情報提供を行なっている Brown〔1991〕が参考になる。また、本文 133 頁に対して注がその二倍近くの 237 頁というほとんど“趣味的”と呼んでもいいのではないかと思われるほど詳細な注を付しながら、膨大な量にのぼる人類学的、民俗学的、社会史的、文化史的、宗教史的その他のデータを駆使して、ここでトランス体験と呼んでいる現象

表現を通して「本当は何なのか」を認識している。VRは真実そのものが何なのか伝えてくれるのに最適とはかぎらない。」(p. 20)とか、「VRというのは、錯覚というものをとことん追求する。本当ではないけれども「…のような気になる」、本当は違うけれどもあたかもそのように見えてしまうものは世の中に多い。それは錯覚ですよ。だからVRはいわば「錯覚工学」ですね。錯覚の研究をしているのであってリアリティの研究ではない。その辺を心得てくれるならば利用価値はないわけじゃない。」(p. 21)といった具合にVR研究の限界について非常に鋭いところをついているように思う。

16) 大谷〔1992〕参照。

17) Rheingold〔1991:pp. 255-286〕参照。ちなみに、VR技術のおかげで、まるで仙人のような体験ができるようになるというあたりにその特徴があるらしいというのが、VR現象についてのぼくの印象である。

18) Tomkins〔1987:pp. 148-149〕。

19) 中村〔1986:pp. 84-85〕での紹介によった。

20) Chatman〔1978:pp. 187〕での紹介による。

21) James自身は、「意識の流れ」(the stream of consciousness)という言い方のほかに、「思考の流れ」(the stream of thought)とも「主観的生の流れ」(the stream of subjective life)とも言っている(James〔1890=1981:Vol. 1, p. 233〕)。ちなみに、彼がこの問題について論じている第九章の表題は「思考の流れ」である。なお、「意識の流れ」についての議論としては、自由連想との関連にも言及しているChatman〔1978:pp. 186-195〕やCohn〔1978:pp. 76-88〕も参照のこと。

22) 彼の主著である『夢判断』で自由連想法に言及しているところをあげておく(フロイト〔1968:pp. 87-90〕)。

23) Martin and Tesser〔1989:p. 306〕は、「反芻的思考」を「長期間にわたってある一定の対象に対して向けられる意識的思考」と定義するとともに、これには、問題解決、予感、(払いのけても払いのけても)割り込んでくる思考等が含まれると述べている。

24) Ackerman〔1990:pp.5-20〕によれば、五感の中でもとりわけ嗅覚はフラッシュ・バック的体験を喚起しやすい条件をそなえているようだ。このフラッシュ・バック的体験とともに、自分の未来を先取りの予感したり夢想したりするフラッシュ・フォアード的体験をも視野に入れるなら、タイム・スリップ的体験と総称することができるかもしれない。この場合には、フラッシュ・フォアード的体験というのは、準トランス

イア・ブルー，レの音は黄色といった具合になっていたようだ。なお，フルートの音と犬のほえ声の例はメルロ＝ポンティ〔1974 :p. 39〕からのものである。

- 9) 本文での定式化はぼく自身のアレンジによるものである。念のためにメルロ＝ポンティ自身の著作からの引用をしておくと，「…メスカリンによる中毒は，それが対象に即した態度をだめにし，主体をその生命力にゆだねてしまう以上，さまざまな共感覚をおこしやすくするにちがいない。」(p. 39)ということになる。
- 10) Ackerman〔1990 :p. 290〕による。
- 11) これに関連してメルロ＝ポンティ〔1974 :p. 39－40〕は次のような主張を行なっている。「…というのも，音を見たり色を聴いたりすることは現象として存在しているのだからである。しかも，それは例外的な現象でさえない。共感覚的知覚は〔むしろ〕通例なのであって，われわれがそれと気づかないのは，科学的知識が〔具体的〕経験にとってわかっているからであり，また，われわれが見ること，聞くこと，一般に，感覚することをきれいに忘れてしまって，われわれの身体組織や物理学者が考えるような世界からわれわれの見たり聞いたり感覚しなければならぬものを演繹しているからである。」この主張はそれなりの詩的魅力をそなえてはいるが，にもかかわらず，通例としてある共感覚的知覚に気づかないのは，ぼくたちが感覚することをすっかり忘れているからだという議論にはいかにも無理がある（共感覚的知覚がそれほど通例のなら，なぜメスカリンなどを使わなくてはならないのだろうか？）のであって，ぼくとしてはこれには与しえないということである。
- 12) これは自己のメスカリン体験を記したハックスレー〔1984〕の著作の表題である。
- 13) VR研究のサブ領域の例は，服部〔1991 :p. 74〕によった。なお，館・広瀬〔1992〕の「1部基礎編」(pp. 11－90)も参照のこと。
- 14) 服部〔1991 :p. 23〕。
- 15) 「リアリティー工学」という表現は服部〔1991 :p. 87〕のものである。彼はそこで「…従来の心理学や人間工学の手法にコンピュータ・サイエンスの成果を取り入れ，何が一体リアルなのかということを論じることのできる「リアリティー工学」という分野ができてよい気がする。」と述べている。他方，「錯覚工学」の方は佐伯〔1992〕の発言である。この佐伯の議論は，例えば「現実の世界を表象するにはいろいろな表現方法がある。記号，言葉，数式，略図，などなどです。我々はそういう多様な



は、“西洋近代”などという問題設定は、テーマ的にいかにも大袈裟なだけにあまり好きにもなれず、自分自身のリアルな問題関心と結びつけていく気持ちなどおこしにくかったが、どうもそう言ってばかりはいられないさそうだ、と重い腰を上げ始めたというところである。ここではこの点を指摘するだけにとどめ、ぼくなりの見解の提示はインパクト分析のセクションでの検討に委ねることにする。

- 3) 水野〔1992 : p. 82〕を参照のこと。
- 4) 対象となる人物のありようをある一定の距離をもって分析・解釈しようとする志向性をもっている者なら誰でも、ここでいう‘分析主体’と見なしうる。したがって、本人自身も‘分析主体’として設定しうる場合があることは言うまでもない。
- 5) 中村〔1979〕は、感覚体験についてかなり包括的議論を展開していて参考になる。感覚体験の文化的多様性については Howes〔1991〕を、またさまざまな文化圏の関連情報を丁寧に拾いあげる形で感覚体験に関する内容豊富な逸話を組み込んだ刺激的な議論としては、Ackerman〔1990〕をそれぞれ参照されたい。
- 6) パロールの〈体験〉的意味をもっぱら重視しようとしているかに思われるラカン派の精神分析学においては、この傾向が顕著なように思う。例えば、石田〔1992 : p. vii〕は、「…精神分析の実践は、体験すること、感じるのではなく、徹底的に言葉にすることであり、精神分析の理論は、この話された言葉を言語として扱い、その構造を明示することであった。分析的に言えば、どのような体験であろうと、それを言語化し、構造化しなければ、何も知った、理解したことにはならないのであり、それどころか、経験したことにさえならないのである。経験が知を生み出すのではなく、「知」がなければ、あるいは「知」とならなければ、経験ではないのである。」と断言している。
- 7) 共感覚についての文献としては、Ackerman〔1990 : pp. 289 - 299〕、中村〔1979 : pp. 131 - 135, pp. 309 - 312〕、メルロ＝ポンティ〔1974 : pp. 35 - 42〕、McKellar〔1989 : pp. 39 - 43〕を参照されたい。本文での議論の仕方からもわかっていただけたと思うが、ぼく自身としては、創造性という主題との関連で共感覚の意義を位置づけようとしている Ackerman の議論が示唆的なように思う。
- 8) 最初のドの音の例は Ackerman〔1990 : pp. 290 - 291〕があげているもので、具体的には作曲家のリムスキー・コルサコフの共感覚の一例である。ちなみに、この作曲家の場合、ラの音はばら色、ミの音はサファ

主体にとって重要な意味をもつ体験を構成する可能性をもった主体的諸契機や生活体験のありようを検討することを目的とした生活体験の主体的側面に関連した重要な議論の一つ，ということになる。ぼくとしては，この主体的側面は，体験主体を体験主体たらしめるのに貢献するとともに，体験のありようを大きく枠づけてくるのに作用していると思われるさまざまな社会的，文化的，歴史的諸事情についての議論によって補完されなくてはならない，と考えていて，これを生活体験のコンテクスト的側面と呼びならわすことにしている。つまり，生活体験論は，基本的に，主体的側面とコンテクスト的側面とをセットにして展開されていかなければならない，という立場に立っているということである。そして，このコンテクスト的側面についての議論をするとすると，今度は否応なく，より社会学的な切り込み方を導入してこざるをえなくなるわけで，ぼくとしては，これは，〈関係〉・〈状況〉・〈相互行為過程〉という三つの基本的契機に目くばりしながら〈生活体験現象〉に接近していけば，かなりこまかいところまで説明できるという見通しを持っている。しかし，本論文の中でそれをやりだすと本稿の趣旨を余りに大きく逸脱してしまう可能性が大きいという判断から他日を期すことにしたという次第である。

第2点に移ろう。このセクションでの議論からも明らかなように，ぼく自身には個人の内面世界への関心があるわけだが，こうした興味関心は，この論文での中心テーマでもある個人の社会的自己形成いかんという問題設定とともに，ぼくの中ではほとんど自明と言っているほど非常に“自然なこと”としてある。しかし，ぼく個人としては，なぜそうした興味関心を抱くのが“自然なこと”と自分には受けとめられるのか，そのこと自体を対象化して主題的に取り上げもっと掘り下げてみようというつもりはなかった。ところが，次の次の回に披露することになるはずの「4. インパクト分析」草稿執筆の過程で自己論ならびに自己形成論についての自分なりの見解を提示しなくてはならないという事情からいろいろ文献にあたっているうちに，Taylor〔1989〕と出会うことになり，そこで展開されている刺激的な議論を検討する過程で，遅まきながら，何らかの形で西洋の近代的自己という問題との関連で自分自身の議論を位置づけておく必要があるそうだとすることに思い至ったということである。これを裏返せば，西洋の近代的自己という問題がそれなりに重要な問題として取り上げられているということについては，当然のことながら，一応の知識として“頭の中では”知っていたけれども，これまで

次の二点に触れておこう。一つは、ここでの、とりわけ体験群1から体験群3にかけての議論がきわめて心理学的色彩が強いという点について。もう一つは、内面世界に対する関心が西洋の近代的自己の問題と接続する側面をもっているらしいという点についてである。

まず第一点から。確か名古屋での生活史研究会の後近くの料理屋での夕食の席上でだったと思うが、かなり以前に中野卓さんに、この「3. テキストのタイプの分析」のワープロ草稿をお見せした時、中野さんから、「非常に心理学的な内容だなア云々」といった趣旨の発言をいただいたことが印象に残っている。中野さん自身はその発言で何を言わんとされたのか、それ以上述べられなかったし、ぼくの方もその発言の含意を問い直すタイミングを失ってしまったように記憶している。ぼくの方は、これは多分もっと社会学的な分析を期待されていたのに、出てきたものがそれを裏切っていた、という含みがあってなされたことだったのではないかと勝手に想像している。

それはともかく、「生活体験の分節化」の議論は、本文でも述べているように、ぼく自身が構想している生活体験論の一環をなすものである。言いかえると、生活体験論の内容は、本文で披露している「生活体験の分節化」論でつくるわけではなく（またついでに述べておけば、以下の本文での記述が主題化したいと考えている内容の広がりからしても、この短いスペースの中でおさまりきれない内容のものでもなく）、その他にいくつも議論しなければならない各論をもっているということである。ここでは、〈本人の内面世界〉についてのぼくなりイメージを提供するという観点から、それに必要な限りで、その概略を非常に圧縮した形で提示しているにすぎない。

では、なぜここで、「生活体験の分節化」の議論を本文に見るような形で展開しているのだろうか。これは、もちろん、すぐ先で述べた〈本人の内面世界〉についてのぼくなりイメージを提供しておきたいという本稿での狙いにも関連しているが、ある個人に即しながらその内面世界についての議論をしようとする、心理学的観点からの切り込みを最優先するということはほとんど必然的であるという判断があるということである。というのは、生活体験を主題的に取り上げる場合には、生活体験が本人にとってもつ意味という問題に取り組む必要があるわけだが、そうすると、体験主体にとっての意味の問題とともに、心や意識にまつわる問題を視野に入れてこざるをえないと思うからである。

この点を踏まえるなら、本稿での議論は、体験主体に即しながらその

ここで、五感に訴える体験や〈体験〉ポテンシャル、〈体験〉と体験群1、体験群2、体験群3とのおおざっぱな対応関係について触れておこう。五感に訴える体験が体験群1に、〈体験〉が体験群3に、ほぼ対応することは容易に見てとれるだろう。問題は、体験群2だが、これらは〈体験〉ポテンシャルや〈体験〉のことをも視野に入れながら着目されているとはいえ、その内容自体は〈体験〉ポテンシャルや〈体験〉に着目する際の発想とは直接的関係をもたないことも事実だ。しかし、体験群2は、体験群1に属する共感覚や仮想現実とともに、それを体験する本人にとってはそれなりに特異な体験となりうる可能性を秘めているだけに、場合によっては〈体験〉ポテンシャルや〈体験〉として受けとめられるというケースが大いにありうる、という意味では微妙な位置を占めている。

以上の検討をふまえて言えば、日常的な生活体験のレベルで〈本人の内面世界〉を直接的に開示しやすいのは、さしあたり、体験群2の中の思考にまつわる体験と過去への飛翔もしくは退行を特徴とする体験といったところだろうか。そうした体験がどういった場合に、ある個人の内的生活史にとって重要な意味をおびてくるかと言え、それは言うまでもなく、体験群2に属すると規定したその他の体験と重なり合う場合、もしくは体験群3に属する体験として登場してくる場合である。（この項続く）

#### 注

- 1) テクストの定義づけがはらむ難しい問題も含めて、非常に示唆的なテキストの定義（ぼくとしては Beaugrande のテキストの定義のことを念頭においている）を試みているものとしては、Bucher〔1990 : pp. 4-10〕を参照のこと。なお、何をもってテキストとみなすかという問題を議論しだすと、場合によってはどれほど抽象的な議論に首を突っ込まなくてはならなくなるか、ということのイメージを得る上では、（物語論などについての情報をうるのにはそれなりに有益な著作と言える）石原他〔1991〕の「テキスト」の項目説明（pp. 4-11）が参考になる。
- 2) ここで若干披露する「生活体験の分節化」の議論の性格に関連して、

に入るものと考えていいだろう。

変容体験 (transformative experience) ——これは、例えば一目ぼれのような瞬間的変容も含めて、それまで本人が持っていた人生観やものの見方、価値観、世界観等が、まったく別のものに転換してしまう体験のことである。ここでいう転換もしくは変容は、例えば、確固とした信念をもって生きていた人物が何らかのきっかけで崩壊感覚を味わうことになるという形で現れてくることもあるだろうし、これとは逆に、それまでどっちつかずの生き方をしていた者が自分の人生の目標をつかむようになるとか、あやふやだったものの見方がはっきりとした焦点を結ぶ（結晶化する）ようになるといった場合もあるだろう。いずれにせよ、ここで変容体験という場合に注目しているのは、ある個人における物事に対する評価や認識の仕方に何らかの形で変化が生じつつある局面である。つまり、例えば幻滅の体験や挫折体験のように、それまでプラスもしくはニュートラルに受けとめていたものがマイナスに、あるいは逆に、ある種の教訓的体験のように、マイナスとしか考えられなかったこととかニュートラルであったものがプラスの意味を持つようになる、といった具合に、ここでは、本人にとっての体験の意味がはっきりとした転換を示しつつある局面（それが瞬間的なものであれ、長期にわたるものであれ）に焦点があてられているということである。したがって、プラスの体験やマイナスの体験、アンビヴァレントな体験もしくはニュートラルな体験の個所であげた体験についても、分析者の観点から見て、本人の受けとめ方の力点に変容のプロセスそのものにおかれていると判断できるものであれば、それは変容体験として位置づけられることになる。なお、自分の一生を左右したと本人に意識される、さまざまな人や読書、絵画、音楽、映像、情景、事件、歴史、文化等との〈出会い〉と呼ばれる現象は、変容体験の宝庫と言えるものである。また、認識上の変化を伴ったカタルシス体験をはじめ、いわゆる「悟り」の体験、改宗体験、転向体験、臨死体験等も変容体験の例である。

しきれないだろうということである。

では、体験群3を次の五つのグループに分けて説明することにしよう。

プラスの体験(positive experience)——これは、通常は、感情的体験のうちプラスの意味で特に強烈なもののことである(まれに、実存的意味でのみ強烈なプラス体験も含む)。一般に感動的体験という形で本人に受けとめられるものはこれに属すると考えてよい。さらにエクスタシー体験<sup>28)</sup>、ピーク体験<sup>29)</sup>、M. Csikzentmihalyi氏の言う意味でのフロー体験<sup>30)</sup>、それからカタルシス体験<sup>31)</sup>のうち認識上の変化を伴わない形で生起するもの等もここに位置づけられる。

マイナスの体験(negative experience)——これは、通常は、感情的体験のうちマイナスの意味で特に強烈なもののことである(まれに、実存的意味でのみ強烈なマイナス体験も含む)。主要なものとしては、心的外傷体験、悪夢体験<sup>32)</sup>、対象喪失体験、どん底体験、燃え尽き体験、ある種のコンプレックス体験、パニック体験等をあげることができる。

アンビヴァレントな体験(ambivalent experience)——これは、感情的体験のうちプラスの意味とマイナスの意味の双方ともが特に強烈なもののことである。典型的には精神分析で言うところのエディプス・コンプレックス的布置状況<sup>33)</sup>での体験やG. Batesonらの意味での二重拘束状況<sup>34)</sup>での体験、それから嫉妬体験をあげることができるだろう。さらにある種の恋愛体験や憎悪体験が愛憎がらみになってくる場合にはやはりこのグループに入れることができるだろう。

ニュートラルな体験(neutral experience)——ここで念頭においているのは、印象的体験である。これは、感情的体験との関連で言えば、プラスともマイナスとも評価しがたいけれども、その〈体験〉をしたりその出来事が生じた場に居合わせたりした時に、何らかの事情から、それを一つの、あるいは一連のエピソードとして後々にまで語り伝えたいほどの強烈な印象を本人にうえつけてしまった体験のことである。また、心理学者たちが注目しているフラッシュバルブメモリー<sup>35)</sup>もここ

時点において、その体験が本人にとってもつ意味（プラスかマイナスかニュートラルか）と、その変化（プラスもしくはニュートラルからマイナスへ、マイナスもしくはニュートラルからプラスへ）に注目する。

ここである個人にとっての体験の意味という場合、ぼくの関心からすると、大きく情動の意味と価値評価の意味（どちらも本人の観点からするものである）とを区別できるように思う。そして価値評価の意味はさらに、実存の意味と生活史の意味とに分けることができる。先に個人にとっての切実な意味と言った場合、どちらかと言えば価値評価の意味あいの方が強いと言ってもいいかもしれない。にもかかわらず、以下の整理では、最後の変容体験の場合を除いて、情動の意味を前面に押し出す形で体験群3の整理を試みる。これは、少なくともある特定の時点における体験のプラス、マイナスの判断をしようとする場合、相対的に言って、情動の意味での判断の方がやりやすいという事情があるからである。（というのは、実存の意味や生活史の意味の方は、時がたつにつれて価値観や認識枠組みに、本人も気づかないうちに思わぬ変化が生じやすいという事情もあって、そうした価値観や認識枠組みの変化とともに、同一の体験についての評価が大いに揺れ動く可能性をもっているからである。）さらに、多くの場合、情動の意味と価値評価の意味とは連動しあう傾向を強く持っているということ、それから一方の意味が他方の意味を生み出してくる傾向を持っているということを付け加えてもいいかもしれない。とはいえ、両者が乖離してしまうという場合も想定しうるし、そうした乖離状況そのものが、ある個人の人生局面においてその個人の内的状況を浮かび上がらせる上で、重要な意味をおびてくる場合もありうるだろう。とりわけこうした乖離を想定しておかない限り、論理的に言って、以下で触れる変容体験の説明ができなくなってしまうはずである。つまり、情動の意味に加えて価値評価の意味への着目という視点を確保しておかない限り、ある個人において経験的事実として現に存在する価値観や認識の仕方の変化が、そもそも生じうるということを説明

（何らかの程度において，日常的な通常の覚醒意識からのズレが見られるという意味で，本人の心理状態が心的分離状態と日常的覚醒意識状態との中間にある場合）と位置づけることにしたい。なお，トランス状態もしくは準トランス状態は，傾向として，過去への飛翔もしくは退行を特徴とする体験を生み出しやすい条件をそなえている，と言えるだろう。

最後に体験群3というのは，ある体験が本人にとって心理的にインパクトがあるかどうか，（プラスにせよマイナスにせよ）本人にとって切実な意味があるかどうか，という問いに対して，分析主体の観点から見て，「ある」という肯定的な答が引き出せる体験群のことである。体験群3は，体験群1や体験群2の場合とは違って，ある個人の生活もしくは人生において非常に大きな重みを持つ（その重みがどういう内実をそなえているか，の確定はともかくとして）ことが明らかな体験群のことであって，その意味でいわば“特権的”体験群と見なせるものである<sup>27)</sup>。一般的に言えば，体験群2のうち，感情や印象，あるいは認識の変化といった点で，特に強烈なものは——体験が持続性を持っているとか，反復的に現れてくるとか，あるいは，累積性をおびていると本人に意識されるような体験とともに——体験群3になりやすい傾向をもっているのではないかとぼくはふんでいる。したがって，感情にまつわる体験や，反芻的思考体験，トランス体験，最初期記憶の体験等は，容易に体験群3に転化する可能性を秘めていると言いうことができる。体験群3は，本人が生活史的物語を紡ぎ出してくる場合にも，その有力な素材を提供するものである。

体験群3のイメージをもう少し具体的にするために，以下，体験群3に属すると思われるものをいくつかあげておくことにする（なお，これらの体験は，体験群3の主要なものに属するとぼくが考えているものではあるが，これらで体験群3がすべて網羅されているというつもりはない）。これらの体験群を整理する際の軸として，ここでは，問題の体験が生起している時点，あるいはその体験を想起もしくは言語化している



のありように着目して前者の反芻的思考と対比的に言及する場合には、これを連想的思考と呼ぶことにする。

第三に注目したいのは、過去への飛翔もしくは退行を特徴とする体験である。これは、W. F. Brewer氏が自伝的記憶の一種として「個人的記憶 (personal memory)」という形で位置づけているものにあたるが、フラッシュ・バック的体験と呼ぶことができるだろう。フラッシュ・バック的体験というのは、例えば、ある言葉を聞いた瞬間、あるいはある情景をながめているうちに、その言葉と響き合う形で、もしくはその現前する情景と二重写しになる形で、自分が過去のある時点で体験した情景、場面、人物等が、フッと浮かび上がってくるといった形での体験のことである<sup>24)</sup>。D. P. McAdams氏が〈earliest memories〉(最初期記憶)という形で紹介しているものの体験もこのフラッシュ・バック的体験の一種と見なすことができる。これは、幼児期体験のうち、本人が覚えている限りで最も早い時期に属するものが何かをきっかけにして蘇ってくるという体験のことで、この最初期記憶を想起する本人の現時点における自己イメージやアイデンティティの問題を考えていく上では特に重要な示唆を与えてくれる可能性をもっているものだ<sup>25)</sup>。

第四に注目したいのは、日常的覚醒意識からのズレの際立った体験である<sup>26)</sup>。典型的なものとしては、トランス体験 (trance experience) をあげることができる。これは、催眠状態におちいった場合や憑依体験のように、日常的な通常の覚醒意識状態とは違った意識状態での体験のことである。この体験は、いわゆる「変性意識状態 (altered state of awareness)」とも密接に関連したものであるが、ここでは、さらに広く、眠りについたり眠りから目覚めたりする局面での体験、夢の状態での体験をはじめ、ドラッグ、アルコール、セックス、暴力的興奮、修行、心理療法、祭り、儀式、暴動等によって誘発されてくる心理状態をも射程に入れて、これらを、トランス体験 (日常的な通常の覚醒意識状態からの心理的分離が完全に起こっている場合)、もしくは準トランス体験

うしたことを誘発し、しかも両者（つまり、L. Bowling 氏が言うところの「感覚印象」と想い<sup>20)</sup>）が相互作用過程に入っていく場合に見られるもので、これには、いわゆる「意識の流れ」<sup>21)</sup>（W. James）と呼ばれる現象が含まれる。この連想的体験は、本人が自己の内面世界にほとんど自然発生的に生み出されてくるさまざまな想いに自己批判を加えてそれらを意識的にコントロールしようとししない限り、かなり頻繁に生み出されてくる可能性のあるもので、ぼくたちは、常に、というわけではないにしろ、潜在的に、ちょっとした感覚印象をきっかけにして、フツフツと浮かび上がっては消えていくさまざまな想い、思考の流れ、内的対話の流れに身をゆだねていく可能性に開かれていると言ってさしつかえないだろう。この連想的体験は、ここで重点をおいている《思い考える》という側面とともに、《夢想し空想する》という側面をもそなえている点には注意が必要である。そして、後者の《夢想し空想する》という側面が強くなってくると、すぐ後に日常的覚醒意識からのズレの際立った体験のところで触れることになる準トランス体験としての様相を強めてくることになるのである。それはともかく、こうした連想的体験の豊かな展開可能性に着目しそれらを方法的に活用したのが、S. Freud の夢分析の中心的手法である自由連想法といってよい<sup>22)</sup>。もう一つ興味深いのは、心理学者たちが〈rumination〉（ここでは「反芻的思考」と訳しておく）と呼んでいるプロセスの体験である<sup>23)</sup>。これは、ある場合には、本人があるテーマに意識的に執着しているために、そのテーマのことばかり考え続けてしまう、という形で、別の場合には、（例えば心的外傷体験の一帰結として）本人の意志とは関わりなく、ある特定のテーマが気になってしまってそのことばかり考えこんでしまう、という形で、起こってくるものである。この特定のテーマへの収斂傾向を示す反芻的思考との対比で言えば、先の連想的体験は、思いつきが自由に羽ばたきかけめぐっていくという意味で、さまざまなテーマへの自由な展開と（場合によっては）拡散を特徴とすると見なすことができる。こうした思考

世界が、その個人にとってもつ実存的もしくは生活史上の意味（この意味そのものに注目しその意味の個人にとっての重みを問題にしはじめると、すぐ後に導入する体験群3の主題領域に入っていくことになる）を考えていく際にも豊かな素材を提供してくれているという意味で、特に注目に値すると思われるものを、体験群2と名づけたい。この体験群2は、体験群1とともに、心理学史上、大いに注目を浴びてきた心理学的事象とすることができるものである。

まず第一に注目したいのは、広く、感情にまつわる体験とでも呼べるものである。これは、プラスにしろマイナスにしろ、一定以上の強さを持った感情の契機と結びついた体験のことである。ここで感情というのは、ある特定の状況、場面、情景等によって誘発されてくるさまざまな感情、あるいはある特定の状況、場面、情景等において、思わず表出もしくは表現されてしまうさまざまな感情のことである。これらの感情は、通常、喜怒哀楽を表していると見られるもので、例えば S.S. Tomkins 氏は、次の10の感情に着目する形で、人間存在が身をさらしている原型的な感情誘発場面を設定している<sup>18)</sup>。それらは、興奮、楽しみ、驚き、恐怖、苦痛、激怒、嫌悪、むかつき、羞恥、罪悪感である。また中村明氏は『感情表現辞典』の中で実際の感情表現例をもとにして、それらを抽出・整理した結果、喜・怒・哀・怖・恥・好・厭・昂・安・驚という10類の感情を導き出している<sup>19)</sup>。こうした感情の契機と結びついた体験としては、(a) 誘発、表出、もしくは表現されてくる感情そのものの体験（これを、感情的体験と呼ぼう）に加えて、(b) 意識的、無意識的に隠蔽もしくは抑圧された感情の体験、さらには (c) 思い入れの激しい(emotion-laden)活動にたずさわっている時の体験等をあげることができる。

第二に注目したいのは、思考にまつわる体験である。これに属するものとしては、連想的体験とでも呼べるものがある。これは、五感に訴える体験が、同時に、何らかの思考・想いもしくは内的対話を伴うか、そ

にさまざまなインスピレーションや強烈な印象を生み出す可能性をもっているように思われる。

もう一つは、マスコミ・レベルで最近つとに注目を浴びつつある《仮想現実 (virtual reality)》(以下、VR と略記) 技術が切り拓こうとしている世界である。VR 研究と言っても、テレロボティクス、シミュレーション、データやモデルの可視化、ヒューマン・インターフェイス、テレコミュニケーション等さまざまなものを含むようだが<sup>13)</sup>、ここで注目したいのは、「コンピュータが視覚や聴覚や運動感覚に訴える人工的な空間を作り出し、人間があたかもその環境の中にいる感覚で機械と対話できる技術」<sup>14)</sup> としての VR の側面である。この VR 研究の可能性を「リアリティー工学」に見いだすか、それとも逆に「錯覚工学」としてその限界を見極めるかはともかくとして<sup>15)</sup>、VR 現象が、五感との関連で人間にとってのリアリティー感覚とは何なのかとか、リアリティー感覚はどのようにして生み出されてくるのかといった問題を提起していることだけは確かなようだ。大谷和利氏は VR の把握の仕方として (1) 機材を使ってマルチメディアを刺激する形、(2) 直接脳細胞を刺激する形、(3) 本人の脳内記憶を利用してイメージを喚起する形、の三つをあげているが<sup>16)</sup>、生活体験論の脈絡で興味深いのは、(1) と (3) である。(1) は、すぐ前で触れた《共感覚》現象に接続する主題領域を指し示しているからであり、(3) は、個人的回想にまつわる主題領域 (後述の過去への飛翔もしくは退行を特徴とする体験参照) に通じるものを持っているからである。ぼくの見るところ、生活体験論とのからみではこうした問題群に、VR 工学を通じての身体離脱の錯覚体験がそれを体験する個人に与える影響いかにという問題<sup>17)</sup> を加えると、VR 現象が面白くなってくるように思う。

次に、体験群 1 と密接な関連があるものの、五感に訴える体験のレベルとは微妙にずれたところに体験としての心理的特質が見いだされるもののうち、ある個人の心的世界の多様性を照らし出すとともに、心的

るために、大きく次の3つのグループの体験群を区別する形で、いわば〈生活体験群のイメージ地図〉とでも呼べるものを提示しておこう。

まず、ぼくたちが日々さらされている五感（もしくはその一部）に訴える体験<sup>5)</sup>を、体験群1と名づけることにする。体験群1は、文化、時代、個人的資質の違い等によって多様な様相を示すものだが、生活体験を主題化する場合、この水準に属する体験をきちんと視野の内に組み込んでおくことは、体験の（それ自体は重要な意味をもっている）言語的側面の偏重に陥らないためにも、重要なことのように思われる。というのは、極端な場合、言語化されたものでない限り〈体験〉とはなりえないかのような“幻想”をふりまく可能性を秘めている言語至上主義的体験観が現に存在するからである<sup>6)</sup>。

体験群1については、感覚体験そのものの多様性が個々人の生のありようにどういった意味をもちうるのか、どういったインパクトを与えうるのか、といった問題を探求することが重要だが、こうした問題との関連で特に注目しておいていいと思うのは、さしあたり次の2つである。

一つは、通常〈共感覚(synaesthesia)〉と呼ばれている事態である<sup>7)</sup>。これは、例えば、(ドレミの)ドの音を思い浮かべると白が見えたり、フルートの音が青緑色の感じを与えたり、犬のほえ声が明るさを惹きつけたり、といった具合に<sup>8)</sup>、複数の感覚が相互に交流しあう現象のことである。主体がその生命力にゆだねられてくるとさまざまな共感覚をおこしやすくなる<sup>9)</sup>とする M. Merleau-Ponty や共感覚と脳の最も原初的な部分との関わりを示唆している<sup>10)</sup> 神経学者 R. Cytowić の議論をふまえるなら、大袈裟な表現に聞こえるかもしれないが、生命力の根源としての原初的なものとの出会いが生み出される特異な時空として共感覚を位置づけることができるかもしれない。いずれにしても、これは、日常的覚醒意識状態におかれている多くの人々にとっては例外的現象と言えるように思うが<sup>11)</sup>、まさにそれだからこそ、異次元もしくは異世界への「知覚の扉<sup>12)</sup>」(A. Huxley)とも言えるこの状態での体験は、その本人

験という場合、最も広義には、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚という五つの感覚に訴えるものをすべて指している。どの程度意識的か無意識的かは別にして、ぼくたちは、日々、いや、それどころか、一瞬一瞬、内的、外的にさまざまなものを見る、聞く、感じる等などということを行っている。そうしたことすべて、つまり、本人が五感のいずれかで（あるいはそのすべてを使って）受けとめていることはすべて、ここで言う‘生活体験’に含めることにしたい。‘生活体験’という言葉には、そこまでの広がりを持たせておきたいということである。ただし、そうした体験がすべて、ある個人にとって同じ重みを持っているか、と言え、そうでないことは明らかである。そこで、そうした五感（もしくはその一部）に訴える体験のうち、ある個人に生起する生活上のエピソード、あるいは人生上のエピソードを（分析主体<sup>4)</sup>が）考えていく上で関連が出てくるかもしれない体験を〈体験〉ポテンシャルとして、また分析主体がそうしたエピソードに関連があると判断する体験を〈体験〉として設定することにしたい。ここでエピソードというのは、ある体験をしたか、現にしている本人が、その時点でその体験に言及する時、あるいは後になって語り手もしくは書き手になって、その過去の体験をふりかえった時に、あるまとまりのある物語として描き出すことのできる個別具体的な、内的もしくは外的出来事のことであり、多くの場合、その本人にとって有意味な内実をそなえたものである。

体験群<sup>1</sup>・体験群<sup>2</sup>・体験群<sup>3</sup>——ここで規定した意味での〈体験〉や〈体験〉ポテンシャルのより具体的な内容の特定化や五感に訴える体験の〈体験〉への（あるいは、その逆という形での）質的転化をめぐる諸問題をはじめとして、〈体験〉や〈体験〉ポテンシャルにまつわるさまざまな問題を相互に関連づけながら論じていくことが生活体験論の主要な課題であるが、ここでは、そのとっかかりをつけるために、‘生活体験’という言い方でぼくがどういった体験群を研究対象として組み込んでこうとしているのか、そのより具体的なイメージを読者と共有す

理が述べられているとっていいだろう。つまり、先に下線を引いた「細い鉛筆の先でそれを写していると心に愛情がこみあげて来る」という心的メカニズムは、日記執筆の際にも働いていたとみなして間違いはないはずだ。

### 3.3. 日記のテキストの類型化の試み

3.2. では、ぼく自身の印象を生かす形で、『中学生』の日記に見られる支配的テキストの特徴について触れたが、『中学生』のテキストが、そうしたタイプのテキストばかりで満たされているわけではないことも事実である。そこでここでは、そうした印象の相対化もかねて、もう少しこまかく『中学生』のテキストをタイプわけしてみることにしたい。しかしその議論に入る前段として、あらかじめ、生活体験論的観点から内的生活史に関連したテーマについて論じておきたいことがある。それは、ぼくが《生活体験》と呼んでいるものの分節化である。

#### 3.3.1. 生活体験の分節化<sup>2)</sup>

先に「1. はじめに」において、中野さんの日記のテキストに由来するむずかしさに触れた個所で、『中学生』の場合、本人の内面世界における心の動きはどうなっているか、とか、どういった心理的・精神的状態にあったか、というレベルに関する情報になると非常に限られてくる、と述べておいた<sup>3)</sup>。テキストのタイプわけという観点からすれば、ちょっとした迂回になるけれども、ここで生活体験の分節化を試みるのは、そこで触れられていた〈本人の内面世界〉という言い方でぼくがどういったことを念頭においているのかを、より具体的に説明しておきたいからである。

五感に訴える体験・〈体験〉 ポテンシャル・〈体験〉 —— ここで生活体

(1) 大切な話，印象に残った語り口や会話は，基本的に，直接話法でそのまま書き写されている。

(2) 可能な限り擬態語，擬音語が生かされている。

(3) いつ，誰が，どこで，何をした，ということがわかるような形で簡潔に書きこまれている。

(4) 自分の内面の描写は極力おさえられている。

(1)，(2)，(3) の結果，そこで描き出されている情景や場面が読み手に生き生きと伝わってくる，という効果がある反面，(4) の帰結として，その場に居合わせた書き手が，どういう内的状態にあったかを，本人の口を通して知ることはきわめて難しい。

では，なぜこうしたタイプのテキストが書かれるのだろうか。中野さん本人の資質・好み・両親や先生，読書の影響等，いろいろな理由が可能性としては考えられると思われるが，ここでは，その理由の一つ，しかもかなり有力な理由を、『中学生』の日記の中から探り出してみることにする。

高原をさまよい，山麓をめぐって，谷間へ下り，丘へ登り，草花の絵を描こう。とがった鉛筆でこまかくこまかく。どうして粗い筆でかけようか，こんなに精巧な草や花を。あざみはとがった針をピンと伸ばし，あさがおは水っぽく爽やかに。細い鉛筆の先でそれを写していると心に愛情がこみあげて来る。花のかおりは，つつましくそれに答えてくれる。(p. 221)

ここで直接に言及されているのは，写生の際の基本姿勢と，中野さんにとってのその心理的もしくは情動的帰結だが，ここには，この当時の中野さんが行っていた対象観察と対象描写（もちろん，ここでいう“対象”の中には，当時の中野さん自身も，それから周囲の世界と中野さんとの相互作用も含めての話だが）の基本姿勢を裏づけている基本論



テキスト（１）は、ぼくが〈生活体験を物語としてつづったもの〉と言う場合に念頭においている典型的なテキストである。夫から転勤の話を聞かされた時の妻の心の動揺からはじまって、それ以降の夫とのやりとりの受けとめ方や想いなどが非常によく描き出されていると言えるだろう。

テキスト（２）は、増田恵一という一人の青年が、当時の友人であった中野さんに、時々襲われる空虚感を含めた自分の内的状況を伝えているものである。

テキスト（３）は、宮崎丈二という当時 21 歳の若者が、もしかしたら自分は病気の体になっているのかもしれないという不安にさらされながら、そうした状況下での自分の気持ちを覚え書き風に書きとめているものである。

テキスト（４）は、父親がお土産に買ってきた笛の音をカッコウの鳴き声と勘違いした時のちょっとしたエピソードを、鳴き声（「カックー、カックー」）や笑い方（「ナァーンヤ。ワハハハハハ。」），それにその時のやりとりを可能な限り再現する形で、書きとめているものである。

テキスト（５）は、渡満部隊を見送った時の一人の兵隊との出会いの様子を書き写したものである。

中学生当時の中野さんは、テキスト（１）のような書き方はしないし、また、少なくとも『中学生』の日記のテキストには、テキスト（２）のようなタイプのものは見つけにくい。さらに日記の文体ということ言えば、テキスト（３）と、テキスト（４）やテキスト（５）との間に、——その違いをどう定式化しうるかはともかくとして——歴然とした違いがあることだけは、わかっていただけよう。

こうした比較検討を踏まえて、次に、『中学生』の日記を一読した時に全体的印象としてぼくが感じとったテキストの特徴——それをここでは〈『中学生』の日記に見られる支配的なテキストの特徴〉と呼んでおく——について触れてみると、おおよそ次のようになる。

だか気がぬけたやうだ。へんだけれど損したやうな気がする。／父や母達も言ふことだから、勉強は次の診察がすむまで待つことにする。／（後略）

出所 阪田〔1989 : pp. 38 - 39〕

#### テキスト（４）

カッコウ 同夜，「〔二階の子供部屋で〕パジャマに着替えていると，カクー，カクーと続けさまに鳥が鳴く。たしかにカッコウだ。それにしても，夜にカッコウがなくものかな？ と，いぶかりながら耳を澄ますと，ちょっと途切れて，また鳴く。／『浩，浩。カッコウや。カッコウが，鳴いてる。お父ちゃんに，言うといない（…）』。『はあ』。喜色満面で浩は階下へ報告に行った。僕はただもう嬉しくてたまらなかった。確かに，カッコウだ。／浩が笑いころげながら二階へ上がって来た。／ナーンヤ。ワハハハハハ。父が上高地で買ってきたお土産の陶器の笛だったのだ」。

出所 中野〔1989 : p. 94〕

#### テキスト（５）

渡満部隊 十二月「十二日，朝，登校の市電〔の車窓〕より渡満部隊を送る。〔うちの孝吉ットンがいるにちがいないと市電の車窓からあちこち探しながら見下ろしていると〕，新兵さんばかりで顔色も未だ白い。兵隊顔になっていない。〔寒さで〕鼻と頬が赤い。皆ニコニコしている。一人の兵隊さんが，ふと電車を見上げた。僕と視線が合った。ニコニコとわらったのが同時だった。手をあげてサヨナラの合図をすると，彼も手を上げた。兵隊さんたちは皆同じような子供みtainな顔に防寒帽をかぶっている。／（後略）

出所 中野〔1989 : pp. 13 - 14〕

こちらで繰り広げられるのだろうか…。

(千葉県船橋市 匿名希望・保母・42歳)

出所 「ひととき」への投書〔1989〕

テキスト(2)

再び葉書〔同じ恵一君より、四日後の、八月八日消印のある葉書も貼ってあります。〕

「親愛なる友よ。僕の生活は怖ろしく空虚で夏は怖ろしく暑く、／僕の心はひからびてしまっている。／僕には怖ろしく心の乾燥した時々があって、／そんなとき僕はくよくよ思ったり苦しんだりするしか出来ない。／来る日も来る日も考え事と向い合って暮らさなければならぬのは大変悲しい事だ。／どうして僕はこんなに熱い心を持って生れて来ねばならなかったのだろうか？／外は夕立がして遠くで雷が音を立てている。蝉も鳴かない」。

出所 中野〔1989:pp. 149-150〕

テキスト(3)

大正七年四月の日記に戻る。小笠原へ行くかどうかは翌日の診察次第、というその翌日に意外な結末が出た。

四月二十日

徴兵の方の関係で明日立てないことになった。／生きてやるぞ。まけるものか。この世に生きてゐる時は短いかも知れない。然し例へば三年生きてゐる間には、きっと百年も千年も生きてやる。

四月二十二日

今日は気持ちがいい。熱もない。／つまらないことで父に反抗したくなるのをほんたうに悲しく思ふ。すまない、悪いと思ふ。

四月二十三日

今日は熱もない。気持ちがいい。／病気でなさうだと思ふとなん

ていた日記からのもの。テキスト（４）とテキスト（５）は、『中学生』からとってきたもので、テキスト（４）は「カッコウ」という小見出しのあるエピソード、テキスト（５）は「渡満部隊」の中心部分である。

#### テキスト（１）

十八回目の結婚記念日の夜、飲んで遅く帰宅した夫が、私の手を握り「驚かないで」と、顔をのぞきこんだ。ひょっとして、と甘い期待をしていた私は、「おれ、転勤らしいんだ。大阪に」という言葉に「エーッ」と絶句してしまった。突然ふってわいたような転勤の話。サラリーマンにはよくある話で、いずれはという気持ちはあった。しかし半年前にマンションを購入し、やっと生活も落ち着いてきたというのに…。反抗期の息子の高校受験も、すぐだというのに…。様々なことが頭の中をよぎった。／今までほとんど会社の話をしなかった夫が、ぼつぼつと話をしてくれるようになった。精力的に燃えて仕事をしているとばかり思っていた夫が、様々な人間関係の中で悩んでいたなんて気がつかなかった私。／この話が出てから夫の帰宅が少し早くなったように感じる。『「家のあることのうれしさ」』『家族のあることのやすらぎ』を今ほど実感したことはないよ」と夫の一言に胸がいっぱいになった。／私たちはいろいろなことを話し合うことにより、相手を思いやる気持ちが深まり新しいきずなが結ばれたような気がする。「亭主達者で留守がいい」とうそぶいていた共働きの私であるが、ため息と涙ばかりの情けない母親を、子供たちは「大阪なんて近いよ」「バイトで新幹線代をカンパするよ」と励ましてくれる。単身赴任（になるであろう）夫には申し訳ないが、皆で力を合わせ、留守を守らなければならないと思う。そして何年か後に、また家族五人が一つの屋根の下に暮らせるようになった時、互いに成長し思いやりあふれる家族になりたいと思う。／正式辞令の日まで悩み多い私たちだが、この春には、悲喜こもごもの転勤劇が、日本のあち

与えておくことにする（なお、そうした文章の一部を指す時には、これをサブ・テキストと呼ぶことにする）。ここでの分析対象である『中学生』の日記に即して言えば、テキストとは、小見出しでまとめられている文章もしくは文章群のうち、主題的に一つのものとしてまとめることができ、しかも単数の日付を持つもの、にほぼ相当すると考えてよい。

なぜテキストのタイプを分析するのか。その理由は、「1. はじめに」のところで若干触れたように、『中学生』のテキストの分析の難しさに関連している。例えば、朝日新聞の「ひととき」欄にのせられている投書のテキストと『中学生』のテキストとを比べてみると、書き手の生活体験の表現の仕方に非常な違いがあることがよくわかる。この違いについての直観的な印象を、ここではテキストのタイプの違いの問題と位置づけた上で、『中学生』においては、こういったタイプのテキストが登場しているのか、言いかえれば、ぼくたちはそこでこういったタイプのテキストと向かいあっているのか——こうした点を詰めてみたい、というのが、ここでやろうとしていることである。テキストのタイプの分析をすることによって、書き手の内的生活史に迫ることが大変難しい、という『中学生』から受ける印象の根拠を探り出すとともに、そうした印象を可能な限り相対化して、書き手の内的生活史に迫っていく何らかの手がかりをつかみたい、というのが、こうした分析をする理由である。

### 3.2. 『中学生』の日記に見られる支配的なテキストとその特徴

『中学生』の日記に見られる支配的なテキストの特徴を照らし出すために、まずはじめに、他の人々の手になるいくつかのテキストとの比較を行なってみよう。ここでは次のような五つのテキストを用意した。テキスト（1）は、「ひととき」欄からとってきたもの。テキスト（2）は『中学生』の中に引用されている友人からのはがきの文章。テキスト（3）は、阪田寛夫『ノンキが来た』という評伝的作品の中にのせられ

# 『中学生のみた昭和十年代』と 個人生活史研究

—三段階の分析の試み—（中）— 1

水 野 節 夫

1. はじめに
2. 見出し分析（以上第 38 巻第 3・4 号）
3. テクストのタイプの分析
  - 3.1. はじめに
  - 3.2. 『中学生』の日記に見られる支配的なテキストとその特徴
  - 3.3. 日記のテキストの類型化の試み
    - 3.3.1. 生活体験の分節化（以上本号）
    - 3.3.2. 六タイプのテキスト
  - 3.4. 小括
4. インパクト分析
5. 終わりに

## 3. テクストのタイプの分析

### 3.1. はじめに

テキストのタイプの分析という以上、まずはじめに、テキストとは何か、という点を明らかにしておかななくてはなるまい。しかし、テキストをどう定義するか、という問題は、本格的に取り組むとなるといろいろな難しい問題を抱え込んでいると思うので<sup>1)</sup>、厳密な定義を下すことは、ここでは断念することにして、テキストとは、主題的なまとまり、もしくは完結性のある文章のことを指す、という具合に、大ざっぱな定義を